

## 胡適——「我が息子」に至る道

西川真子

はじめに

胡適<sup>1</sup>は、一九一〇年代後半、中国にとって最も新しい思想をもたらした知識人の一人である。彼は一九一〇年に渡米留学して以来、当初はコーネル大農学院に籍を置いたが、後に同大学の文学院に転じ、さらにコロンビア大学に移り哲学者デューイのもとで研鑽を積んだ。約七年間の米国滞在中に近代の知識人社会を实地に見聞した彼は、連続と受け継がれてきた中国の伝統的な思想を根底から再考し、中国の近代化に不可欠な新しい視点をつぎつぎに提示していった。

多岐にわたる活動の中で、胡適が最初に取り組んだのは、中国の文学を時代に即し現実社会を反映する「生きた文学」として活性化させることだった。そのために彼は、米国留学中に雑誌『新青年』に「文学改良芻義」<sup>2</sup>を投稿、中国における白話運動の提唱者となった。彼は帰国後「文学改良芻義」の続編となる「建設的文学革命論」<sup>3</sup>を發表し、白話を用いることによって中国の文学を活性化させ新しい文学を生み出さなければならぬと説いた。新しい白

話文学を創造しようという胡適の主張の中でも、白話で詩を書くことについては、とくに周囲の批判が大きかった。胡適は賛同者を得られぬまま奮闘し、独力で白話詩の創作をつづけた。

新しい文学の創造と並んで、この時期胡適が関心を注いだのは、中国の伝統的な家庭制度に関わる問題であった。当時の先進的な知識青年にとつて、本人の意思を無視した旧式な婚姻は、個人の自立を損ない社会の発展を阻む根本原因と考えられた。単に記事を投稿するだけでなく胡適が編集にも深く関わった『新青年』は、封建的な家族制度への批判と、当事者の意思による自由な恋愛と婚姻の問題を議論する場となった。胡適自身もこれらの問題に対し「イブセン主義」<sup>4</sup>「米国の婦人」<sup>5</sup>「貞操問題」<sup>6</sup>などの論考を立て続けに発表した。

胡適は、帰国前後におこなったこれら一連の活動によつて新文化運動の担い手の一人と称されるのであるが、彼の論考には、革新的な主張を唱えると同時に伝統を重視する知識人の反発を避けようという意識が読み取れる。彼は、中国の近代化にむけて、根本的な議論を提起し長期的な展望をはかるといふ態度でのぞんだ。なぜなら彼は当時の米中国社会にじかに触れ、みずから体験した米国の先進的な価値観が中国の伝統と相容れないことを理解し、中国の典型的知識人が速やかに欧米の近代文化を受け入れることには大きな困難を伴うことを熟知していたからである。

胡適は帰国後も、保守派の反発を抑えるために「文学改良芻義」の発表当時にみせた慎重な態度を捨てなかつた。だが『新青年』『毎週評論』等の雑誌を舞台に文筆活動を展開する中で彼にはいくつかの転機がおとずれた。本稿では一九一〇年代後半、これらの雑誌に載せられた胡適の文章を材料に、胡適が中国の伝統社会とどのように向き合おうとしたのか、その経緯を考察する。

## 一 「文学革命」

一九一七年七月、留学を終えて帰国した胡適は、北京大学哲学科の教授として教鞭をとりつつ活発な言論活動を開始した。帰国当時、胡適が中国社会に対して取った立場は、「帰国雑感」<sup>7</sup>から読み取れる。胡適は中国を「惰性」の支配する社会と理解していた。胡適のみるころ、中国人は従来の価値観に疑問を感じることはなく無批判に慣習を継承し、社会を積極的に改良することに関心を示そうとしなかった。胡適はこれより、中国人に染み付いたこの種の惰性を批判し続けることになる。しかし彼は中国社会を覆う惰性の力を熟知するがゆえに、七年ぶりに目の当たりにした故国に対し「大きな希望など抱いていないが、決して前途を悲観しているわけでもない」という態度を見せた。これによって彼は、近代西欧の新しい思想を持ち込む際に中国の伝統的価値観を不必要に刺激することを避けたのだが、こうした胡適の態度は既に留学中から表われていた。

一九一五年九月、胡適は米国で留学生生活の六年目を迎えてコロンビア大学哲学科に転学し、以後約二年間同大学で哲学者デューイに師事しつつ中国哲学並びに文学を研究するための基礎を培った。この時期の胡適の日記を見ると、文学研究に関する具体的な記述が頻繁につづられている。彼の興味は、中国文学史、文語と白話、詩と文、文字及び句読点の用法など多方面に向けて示されているが、中でも彼は借り物ではない真の文学は白話文によってこそ表現が可能であるという考えに確信を持った。実際に一九一五年の夏頃より、胡適は同じ留学生仲間である任叔永、梅觀莊、楊杏仏などと文学について語り合う中で白話を用いて詩を書くことに関心を強めていった。しかし胡適の熱心な主張とは裏腹に、友人たちの中で胡適に同調するものは少なく、大半の者が白話体で詩を書くことに消極的であった。胡適は賛同者を得られぬものの独力で試行錯誤をつづけた。一九一六年八月二一日の日記に、彼は次のように記している。

わたしは白話で詩を作ることを主張するが、友人の中には反対する者が多い。だが人はそれぞれに志があるのだから、無理強いするには及ばない。わたしもまた人に反対されたからと言って白話を取り下げなくてもよい。他人もまた白話を用いて詩を作る必要などない。白話詩の創作はわたしの主張する「新文学」の一部分に過ぎない。<sup>8</sup>

新しい文学の創造に対する使命を自覚した胡適は、一九一六年、『新青年』（第二卷第二号）誌上に陳独秀宛の公開書簡を投稿し、初めて中国国内の知識人に向けて、「文学革命」の意図を表わした。その中で胡適は「文学革命」を起こすための八つの条件を書き起こした。さらにその三ヵ月後の翌一九一七年一月、胡適の打ち出した「文学革命」の構想は『新青年』（第二卷第五号）に「文学改良芻義」と題して掲載された。文中には、「言葉に中身が有ること」「古人の模倣をしない」「文法を追求する」など、先に『新青年』第二卷第二号で発表した意見を基に、さらに詳しく論述をおこなった後、文末に結論として次の言葉が添えられている。

遠く異国に在って、読書の暇がないばかりか、国内の諸先生や専門家の皆様について不明な点をお尋ねすることもできず、主張するところにはゆき過ぎた点もあるかと存じます。ただこの八項目はどれも文学上の根本問題であり、一つ一つ研究の価値がございます。それゆえこの論を起草し、国内外でこの問題に関心をお持ちの方々むけて草案を作成しました。これを芻義と名づけたのは、未だ定稿ではないからで、中国の同志諸賢が間違いを正して下さる事を心よりお待ちします。<sup>9</sup>

胡適は「文学改良芻義」を発表する前に、一連の考察をみずから「文学革命」と名づけていた。<sup>10</sup>しかし、留学生内の議論においてさえ胡適の意見に支持者を得るのは難しく、胡適はほとんど独力で白話による詩作に取り組んだ。この状態のなかで『新青年』へ論稿を掲載しても、中国国内の専門家の中から厳しい反論が出てくることは容易に想像できた。そのため彼は論考から「革命」の文字を取り去って「芻義」に置き換え、主張は明確で革命的だが表現は控えめに打ち出すという姿勢を取った。

一九一八年四月、留学を終えて帰国した胡適は『新青年』（第四卷第四号）に「建設的文学革命論」を発表した。「文学改良芻義」の発表からは、一年余りが過ぎていた。胡適がこの時期に「建設的文学革命論」を発表したのは、「生きた国語で文学を作り文学的価値を持つ国語を創造する」という彼の主張の実現にむけて前進するためだった。

わたしが「建設的新文学論」でただ一つ訴えたいことは、つぎの十個の文字で表わせる。すなわち、「国語的文学、文学的国語」がそれである。われわれが提唱する文学革命は、要する中国に国語による文学を作ることである。国語による文学が有ってはじめて文学的な国語が生まれる。文学的な国語が有ってはじめてわれわれの国語は本当の国語と称せるのだ。<sup>11</sup>

「文学改良芻義」が、中国人が古い文学と縁を切り文語文で書かれた文学の退場を促す勧告文だとすると、「建設的文学革命論」は、中国が新時代にふさわしい新しい文学を創造するための設計図と言ってよい。だが、白話文を用いて文学の創作を実践することがいかに困難な仕事であるか、彼は十分承知していた。既にアメリカ留学中から白話詩の創作を提唱してきたものの、多くの友人から白話詩の創作に反対を受けた事実が示すように、現実には中国の知識人の多くが白話文による文学の創作に懐疑的であり、胡適自身も熱狂的なスローガンだけで社会を動かせるもので

はないことを理解していた。胡適はこうした状況の中で引き続き慎重な態度を選んだ。

「建設的文学革命論」は、白話を基礎に洗練された「標準国語」によって現実社会を反映した文学作品を生み出すための方策を述べるものである。そこで胡適は「文学改良芻義」で示した「八不主義」を基に、新しい文学を創作するための指針として、「(一) 言いたい事があつてはじめて言う、(二) 事実として存在することを、事実に則して話す。(三) 自分の話を語り、他人の話をしない、(四) その時代の人として、その時代の話をする」<sup>12</sup> ことを基本姿勢とした。この四か条は「八不主義」を肯定的表現で書き直したものであり、胡適はこれを「半分は消極的、半分は積極的な主張だ」と評した。この四か条を指針に、生きた国語で書かれた文学を創造することが、胡適の言う文学革命の趣旨だった。彼はこうした手順を踏まえて白話文による創作を提唱したのだが、白話文による文学の創作をやみくもに推し進めようとしていたわけではない。

読者には誤解しないように求めるが、わたしは白話を使った書物がみなどれも価値があり生命を宿しているとは言っていない。わたしが言うのは、死んだ文言では決して血が通った価値ある文学は作り出せないと言ふことだ。(中略) 言い換えれば、白話は価値のある文学を生み出すことが出来るし、価値のない文学も生み出だすということだ。すなわち『儒林外史』を生み出すことが出来るし、『肉蒲団』も生み出すということだ。ただ、もう死んでしまった文言は価値も生命もない文学を生み出すだけであり、価値も生命もある文学は決して生み出せない。<sup>13</sup>

胡適はこのような立場から慎重に標準国語による文学の創作を目指そうと考えた。彼は「建設的文学革命論」の中で新文学の創造に至る過程を、(一) 工具、(二) 方法、(三) 創作の順に説いた。工具と方法は、国語による文学、

文学的な国語を作り出すための土台であり、その土台が固まった上で創造の段階が始まる。工具と方法をいかに準備するかについて、胡適は詳細を説明する。胡適のいう工具、すなわち文学を書く道具は標準国語である。他方、創作の「方法」については、胡適は社会の現実を实地に観察し個人の経験に基づく題材を選ぶことから始まると言う。そして選んだ材料を作家が的確なイマジネーションによって整理し構想を練ることで文学は生まれるのだが、当時中国にはこうして書かれた作品は存在しなかった。胡適はこの不足を、西欧文学の名著を翻訳して模範に当てるほかはないと説いた。実際、二カ月後の一九一八年六月、『新青年』第四卷第六号は「イブセン特集号」として発行され、「人形の家」をはじめとするイブセンの代表的劇作品三つが翻訳紹介された。

胡適の理論によれば、このような準備を経た後に中国でも初めて新しい文学の創造が可能となるはずだった。ところが胡適は、新しい文学の創造について彼自身には語る資格はないと言う。

先に述べた道具と方法の両項は、いずれも新文学を創造するための準備に過ぎない。道具の使い方に熟練して無理がなくなり、方法も理解した時に、はじめて中国の新文学を創造し得る。新文学をどのように創造するかはまた別の問題で、わたしには口をする資格がない。わたしのみるところ、今の中国には新しい文学の創造を準備する下地が出来ておらず、創造の方法や手段を空談しても意味が無いものと思われる。われわれは現在まず、第一、第二の準備の仕事に力を注ぐべきなのだ。 14

「文学改良芻義」を世に問い、白話文学の創造と文学的鑑賞に堪え得る国語を作り上げる重要性を確信しはしたが、実際の創作を説明する段階になると、胡適は未だ語る言葉を持たなかった。当時の中国で白話運動を推し進めた場合、保守的な知識人の抵抗は眼に見えていた。胡適は空砲を打ち上げて成功の目途の立たない運動に大衆を巻き込

むことを拒んだ。自分の言葉で大衆を目覚めさせ運動に動員するという発想は、胡適の文章からはうかがえない。

われわれ文学革命を提唱する者は、かの腐敗した文学に対し、皆がそれぞれ「取って代わらん」という気持ちを抱き、建設という観点から力を尽くし、三十年あるいは五十年のうちには中国に新中国の生きた文学を作り出したものである。<sup>15</sup>

胡適が言う「文学革命」は、生命力を失った古い文学を破壊し、生きた言葉で書かれた新しい文学を生み出した時にはじめて完成する。だが胡適によれば、中国にはまだ「死んだ文学」が生きながらえており、それは「真に価値があり生気にあふれた、文学の名にふさわしい新しい文学が存在しない」からだった。新しい文学を創造するための構想を、胡適は「生きた国語で書かれた文学、文学的価値のある国語」の創造という言葉で表現した。彼は、生きた白話文によらなければ新しい文学は創造できないこと、近代に至りヨーロッパから始まったこの潮流に逆らうことは出来ないことを、順を追って述べる。

われわれが今日国語による文学を提唱するのは、意義のある主張である。国語を文学的な国語にしなければならぬ。文学的な国語が有ってはじめて、標準的な国語が作られるのだ。<sup>16</sup>

胡適は文学革命の意義を確信してはいたが、ただちに全面的な文学革命を実行する意図は持たなかった。彼は、白話文を自分の主張を自分の言葉で表現するためにこそ必要な道具ととらえ、権力によって強制的に普及させるものとは考えていなかった。さらに加えて、胡適は文語文をすべて単純に白話文に置き換えられるとも考えていなかった。

文語文は社会の隅々で通用しており、中国人の生活の隅々にまで影響力をもっていることを彼は無視できなかった。「建設的文学革命論」が発表された翌号の『新青年』（第四卷第五号 一九一八年五月）で胡適は、文学改革に対して読者から寄せられた意見投稿に答え、次のように語った。

学校を出た後何か仕事に就くとして、たとえどの道に進もうと、白話など使い道がない。目下、大總統や國務總理の公文はすべて駢儷体で書かれている。かと思えば豆腐屋が年始の挨拶を書く場合にも、「桃符献瑞、梅萼呈祥、遙知福履綏和、定卜籌祺迪吉……」などというおさまりの文字を使わねばならない。われわれがもし学生に一律白話文だけを教えたとしたら、彼らは卒業後、総統府や國務院の秘書になれないばかりか、豆腐屋の番頭さえ務まらないのだ。<sup>17</sup>

彼が目指したのは短期間のうちに強力に白話文学の確立を達成することではなかった。胡適はあくまで、国民が求めるすぐれた文学作品を白話文で書き、その作品が社会に普及することによって標準的な国語を定着する理想を追求しようとしたのだった。

一九一八年四月、『新青年』（第四卷第六号）は「イブセン号」と題する特集を組んだ。この企画は、単にイブセンとその作品を中国で紹介すると言うだけでなく、胡適が既に「建設的文学革命論」の中で述べた、未だ見るべき文学作品をもたない中国に、模範となる西欧文学の名著を翻訳して紹介するという主張を実践すること、さらにはイブセンの作家としての態度を「イブセン主義」と名づけて読者に示すという意味があった。特集号の体裁として、巻頭には胡適の筆による「イブセン主義」が掲げられ、つづいて胡適と羅家倫の翻訳によるイブセンの作品『人形の家』『国民の敵』（陶履恭訳）『小さなアイヨルフ』（呉弱男訳）が並び、巻末には袁振英作「イブセン伝」が配された。

胡適がイブセンに注目したのは、彼がイブセンを社会の現実に眼を向け真実を語る写実主義者と理解したからだ。た。「イブセン主義」の中で胡適は次のように述べる。

・・・イブセンの人生観は、ただ一言でいうなら写実主義である。イブセンは家庭及び社会の実際の情景をすべて描き出して人の心を動かし、我々の家庭及び社会はこんなにも暗く腐敗していることを思い知らせ、家庭も社会も革命を起こし新しくするしかないと思わせる——これが「イブセン主義」である。<sup>18</sup>

胡適は、イブセンが家庭と社会の真の姿を隠すことなく描いたことに着目した。胡適は、イブセンの行為を腐敗した人間の体面を破壊し、社会の秩序を覆すこと、すなわち医者が患者の病状を正しく診断するさまに譬えた。病状を把握し正しい診断を下すことは改革の第一歩であり、胡適にとってイブセンは最良の診断医と見えた。ただし、「イブセンは脈案（診断書）はたくさん書いたが、処方箋は簡単には書こうとしなかった。」<sup>19</sup> 胡適はこれを、人類社会の組織があまりにも複雑で、種々の案件は互いにも状況が違いすぎる中、もとより万病に効く薬などないために、イブセンはやむなくただ診断を下して病状を説明するにとどめ、病人に各々自分の病に効く薬を探させようとしたからだと言く。

社会や国家は時々刻々と変化するものであって、ある一つの方法だけを救世の良薬だと定めることはできない。十年前には補強剤を使ったが、十年後に下剤を使わねばならないかもしれない。十年前は熱さましを使ったが、十年後には発熱剤を使うべきかも知れない。まして社会や国家はそれぞれにみな違うのだから、日本に適用した薬が中国でもそのまま通用するとは限らない。ドイツで効いた薬がアメリカで効くとも限らないのだ。<sup>20</sup>

中国では、中国に合う処方箋を見つけなければならず、そのためには現実を見据えることが必要だった。時代は刻々と変化し、人間もまたそれに応じて絶えず進化しなければならない。社会の変化に対応せず過去の知恵を何の工夫もせぬまま再度使いまわすことは、知識人の怠惰を意味した。

胡適は、イブセンを知ること、現実を直視する「写実主義」の立場を取ること、現実を反映した作品を書くことを自覚した。「易卜生主義」のなかで胡適は『人形の家』の主人公ノラの台詞「女性は妻や母親であるより前に何よりも、まずひとりの人間だ」という言葉を借り、個人の自立の重要性を強調した。ここに、胡適にとって「個人の自立」は中国人全体の課題として意識され、特に中国の家庭制度の中で各人がいかに自立するかという問題が前面に浮かび上がってくる。

## 二 女性問題

帰国以来、胡適の研究と文筆活動は順調に進展していたが、家庭生活においては彼は自分の意思に反する選択を迫られた。それは一九一七年一月に一三年来の許婚であった江冬秀と成婚を果たしたことを指す。彼は母親の意向に添うべくこの結婚を受け入れたが、近代知識人の理想とは程遠い出来事だった。<sup>21</sup>この結婚によって胡適は、男性に依存して家の中に暮らすほかない中国女性の現状を直視せざるを得なくなった。

五四運動前後、進歩的な知識青年にとって、女性問題は切実に議論を要するテーマであると捉えられていた。辛亥革命によって清朝が倒れ中華民国が誕生したが、袁世凱が政権を握ったことをきっかけに体制は旧時代に逆行しはじめた。家庭制度もまた依然として儒教の影響から抜け出すことができないままだった。

このような状況の中で、西欧思想に触れた知識青年たちが、封建的な婚姻制度から解放されて自由恋愛及び自由結

婚を可能とするには、婚姻制度の中で当事者の発言権を確保するとともに、先に西欧思想の感化を受けた男性知識人にふさわしく、その配偶者となる女性を覚醒させることが必要だった。『新青年』はこの課題にいち早く着目し、「女性問題」を集中的に論じる企画等を試みたが読者からの反応は鈍く、必ずしも関係者が期待した効果を得られたわけはなかった。作家の周作人はこうした事態の突破口を開く意味もこめて、一九一八年五月『新青年』（第四卷第五号）に日本の女性歌人であり活発な文筆活動をおこなっていた与謝野晶子の論考「貞操は道德以上に尊貴である」を中国語に翻訳し「貞操論」<sup>22</sup>と題して発表した。同文には表題の「貞操論」に続き副題として「日本與謝野晶子著（人及女トシテ中之一篇）」の一行が添えられ、さらに本文に入る前には、周作人自身による短い序文が排された。周作人はそこで、極少数だが既に覚醒し問題の重要性を認識する男性知識人に対し議論を促す目的で「貞操論」を翻訳して世に問うたと述べている。<sup>23</sup> 周作人の言うとおり与謝野晶子の文章は、女性にとって儒教が女性の美德として最も重視する「貞操」を堅持することが、実は表面的に儒教制度にならって結婚生活を送るだけでは達成不可能であること、「貞操」は真の恋愛によつて婚姻を結んだ夫婦間にはか成立しないことを整然と論述するものだった。<sup>24</sup>

周作人の期待を裏切ることなく「貞操論」は読者の反響をよんだ。胡適もこの文章に刺激を受けた知識人の一人だった。胡適はもとより中国の封建的な秩序を重んじる知識人が近代の価値観を受け入れるには強い抵抗を伴うことを熟知していた。そのため彼は保守的な意見をもつ知識人に対して慎重な態度を取り、必要以上に保守派を刺激すること避けてきたのだった。ところが、中国に劣らず封建的な家庭制度を継承してきた日本の女性がこのような大胆な主張を公にしたことに、胡適は驚きを隠せなかった。彼は周作人の翻訳に込めて、同年七月に『新青年』（第五卷第一号）に「貞操問題」を表わした。

周作人先生が翻訳された日本の与謝野晶子の「貞操論」を読んで、わたしは大いに感じるころがあった。この

問題は、世界で数千年もの疑いを差し挟むことなく信じられてきたが、ここ数十年の間に、西洋の学者が正面からこの問題の本当の意義を討論するようになった。文学者イブセンの『群盜』やトーマス・ハーディの『テス』などは、みなこの問題を論じている。今家庭の専制が最も厳しい日本においてすらこのような大胆な議論が起るとは！東洋文明史上においてきわめて喜ばしい出来事である。<sup>25</sup>

貞操問題に関する与謝野晶子の主張は胡適に鮮烈な印象を与えた。女性問題を正面から論述することに意義を認めた胡適は、旧態然とした中国の知識人の責任感を目覚めさせることを意図して論考を発表していった。一九一八年九月に発表された「米国の婦人」(『新青年』第五卷第三号)は、胡適が北京女子師範学校でおこなった講演を基に書かれた。文中、胡適は、中国の女性に「良妻賢母を越えた人生観」を持つことを提起した。彼は、中国が長年受け継いできた儒教体制は「男は外、女は内」を原則とし、女性が家庭の外で活動することを拒んできたが、もっぱら家庭の中で暮らすことは女性の自立を阻むと考えた。すなわち彼は、男女の役割を家の外と内に厳しく分けてきたために、「内」に属する女性の中に依頼心が根付き自立する力を失ったと結論づけたのだ。胡適は、アメリカの女性が家庭の外で、活発に社会に参加していることを紹介し、中国の女性に自立の意義を説いた。

我が中国の姉妹たちが、もしこの「自立」の精神をもって、我々の「依頼」の性質を補うことができるなら、もし「良妻賢母を超えた人生観」をもって我々の「良妻賢母」の観念を補うことができるなら、中国の女性界に「新鮮な空気」をもたらし、中国に真に「自立」した女性を生むことができるでしょう。この「自立」の精神は、他者に伝わっていくという性質を備えています。女性の「自立」の精神は、特に他者へと伝わる力が強いのです。将来こうした「自立」の気風は、ペスト菌のようにどんどん広がってゆき、無数の「自立」した男女を作り出し、

人はみなそれぞれ堂々たる一個の「人間」で、自分には果たさなければならぬ義務もあれば、為すべき仕事もあるのだと自覚するようになるでしょう。<sup>26</sup>

アメリカ留学中の体験から、胡適は近代を迎えて社会は大きく変質し、伝統に固執することは世界の潮流に逆らう行為であると認識していた。だがその一方で胡適は、中国を長期にわたって支配してきた儒教体制がそう簡単に変質するものではないと自覚していた。彼は世界の潮流と中国の現実の矛盾に苦しむが、中国社会の改革を説くに当たって性急に新思想の普及をはかっても一気呵成に人々の意識を刷新できるとは考えなかつた。胡適が選んだ手法は、最新の学説を研究し議論を重ねる中で中国人の自立という観念を徐々に浸透させていくことだつた。

元来、胡適が深く関わつた『新青年』は、発刊以来政治とは一線を画し新しい知識の紹介と学術的議論に重点をおいていた。そこでは雑誌として一方的に記事を提供するにとどまらず、通信欄を舞台に読者と執筆者の間で議論を進め盛んに意見交換がおこなわれた。熱心な執筆者たちと読者からの共感に支えられ『新青年』は新しい知識を求める青年層の議論の媒体となつた。胡適はその中で特に第四巻から第五巻かけて発行された各号について、積極的に編集に関わつた。

文筆の世界で順調に活動をする中、私生活においては、胡適には新たにいくつかの変化が生じていた。冬秀との結婚から約一年後の一九一八年一月胡適の母が病没し、翌一九一九年三月には長男祖望が誕生した。社会の動きと個人的な家庭内の事情の双方に生じた変化により、一九一九年に入ると、彼が帰国前後から続けてきた一連の言論活動に転機が訪れた。

### 三 写実主義との格闘

小説と論説の両面で健筆を振るった同時代の知識人魯迅との違い、胡適には白話詩をのぞいて小説や戯曲など文学作品はさほど多くはない。だがその中で、一九一九年に胡適は創作文学としていくつかの作品を発表している。同年三月『新青年』（第六卷第三号）に発表された戯劇「終身大事」<sup>27</sup>及び、同七月に『毎週評論』の第三二期及び第三三期に連続して掲載された「ある問題」（原題「一個問題」）<sup>28</sup>と「我が息子」（原題「我的兒子」）<sup>29</sup>である。

「終身大事」はイブセン作の「人形の家」が下敷きになっている。「人形の家」は主人公ノラが覚醒する過程を描くことによって人間の自立という問題に焦点をあてた作品である。これに対して「終身大事」は「人形の家」から発想を得ているが、本来宴会の余興に演じる軽い戯曲として胡適が諧謔を加味して書いた喜劇の小品である。『新青年』に掲載する際に、この作品には、戯劇の脚本としての本文の前後に序と跋が付された。序文には、胡適がなぜこの戯劇を執筆するに至ったか、そのいきさつが書かれている。それによると、米国の大学の同窓会で北京在住の会員たちが宴会をひらくことになり、その席上で短い戯劇を上演するので胡適に脚本を書いて欲しいと依頼され、やむを得ず一晩でこの作品を書き上げたという。ところが女主人公を演じる女優がみつからず、この劇の上演は見送られた。ただ作品を読んだ胡適の友人がこの劇は上演すべきであると主張したので彼らに取り扱いを任せたところ、ある女学堂で上演するというので、胡適は元の原稿を中国語に翻訳したのだという。胡適は序文の中で以上のようなこの喜劇を執筆するに至った事情を述べた後、さらに序文の末尾には、この戯曲は西欧では Façade と呼ばれる種類の、たわいもない喜劇だが、自分にとっては処女作品であり、友人たちに不出来を笑わぬようにと書き添えている。このような序文の後に戯曲の作品本文が掲げられ、さらにその後には跋文が続く。

跋文には、もともと英語で書かれていた「終身大事」を北京の女学生たちが上演するというので漢語に翻訳した事

とその後の顛末が語られる。それによると、この作品の中で、主人公の田亜梅女史は思いを寄せ合う相手と駆け落ちをするのだが、その場面が原因で、女学生の中からこの田女史の役をやってやろうと言う者が出てこなかった。しかも女学生たちの在籍する女学堂はこのようなあまり道徳的とは言えない劇を上演するのは不都合な点もあると言いつ出し、この原稿はまたしても突き返されてきたのであった。これについて、胡適は「我々は常日頃写実主義を提唱しているが、今わたしのこの劇を演じようという人がいないのは、きつとそれが写実的ではないからだ。写実主義に合わないこの劇は、もとより何の価値もないので、友人の高一涵に送って『新青年』の埋め草にするしかなかった」という。

「終身大事」は、日本に留学経験のある若い男女の結婚にまつわる顛末を風刺的に語るものだが、劇中、女主人公田亜梅の婚約者陳先生は、両親に結婚を反対されて途方にくれる亜梅に対し「これはわたしたち二人だけの問題で、他人は関係ない。君は自分で決断しなくてはいけない」という手紙をよこす。胡適はここに登場人物の台詞を借りて「みずから封建的な家を捨てよ」というメッセージを送ったのだ。だが、このような革新的思想が簡単に中国社会に受け入れられないことを胡適は十分に承知していた。その故にこそ、胡適は封建的な家を捨て自分の意志で行動せよというメッセージを非現実的な喜劇の中に盛り込んだとも言える。だが結局は先述した事情により、この作品はついに戯曲として上演される機会を得なかった。女主人公を演じようという女優が見つからない上に社会的に不道徳な作品と目されたことよって、胡適はこの作品を写実主義の精神に反したがために社会の支持を得られなかった失敗作とみなした。こうした紆余曲折を経てきたがために「終身大事」が『新青年』誌上に掲載されることになった時、胡適は作品を前後から挟むように序と跋を付して、作品誕生の由来を語り、写実性を欠くこの作品には何も価値はないと、自嘲をこめた評価を下したのである。

「終身大事」の発表後まもない一九一八年三月一六日、長男祖望が生まれ、胡適は父親になった。五四運動開始の

直前の出来事である。父親となったことよって胡適には、父と子の問題を避けることなく正面から向き合わざるを得ない状況が生まれた。そんな胡適をとりまく周囲の状況に眼をやると、一九一八年の秋、政治の世界では第一次世界大戦が終結し、ベルサイユ講和会議の開催が日程に上ろうとしていた。政治情勢の推移にしたがって、『新青年』もまた雑誌の性格を変えはじめた。戦後の体制を整えるために政治の世界で新しい動きが始まったことは、中国の言論界にも影響を及ぼした。新しい世界秩序をどう築くのか、さまざまな主張が登場し、活発に議論をおこなう空気が社会を包みつつあった。

こうした時勢を反映し、一九一八年二月、陳独秀と李大釗を中心に北京で『毎週評論』が創刊された。『毎週評論』の編集責任者たちには、陳独秀、李大釗の他に、周作人や胡適を含む『新青年』の有力な執筆者たちと同じ顔ぶれが幾人も名前を連ねている。胡適は掲載記事の選考人という立場でこの雑誌に関わるとともに、彼自身もまた記事の執筆をおこなった。<sup>30</sup>

『新青年』は発刊以来、政治の世界とは一線を画し学術的問題を論じる雑誌として編集されてきた。これに対して『毎週評論』は、積極的に政治時評を掲載し活発に議論することを意識して発刊された。『新青年』に集まっていた執筆者たちは、現実の社会により近づいて、議論をおこなうことを念頭においていた。第一次大戦後の情勢をにらみ、中国がいかなる方向に進むのかさらに議論が高まろうとしていた矢先、ベルサイユ講和会議の結果が伝えられると中国は失望と落胆に覆われた。一九一九年五月四日には事態に反発した北京の大学生たちが抗議のデモをおこなった。他方陳独秀は事件の発生以後過激な論評を発表したために、同年六月一日に逮捕された。このため胡適は陳独秀に代わって急遽『毎週評論』の編集に責任を負うことになったのだが、胡適が編集に当たるようになった後『毎週評論』の論調は変化した。一九一九年七月二〇日胡適は『毎週評論』（第三期）に「問題を研究することを多くし、『主義』を語ることを少なくしよう」<sup>31</sup>を発表し、戦闘性を抑えて冷静な議論を深めることを強調した。<sup>32</sup>だが胡

適の編集方針を批判する声は直ちに現れ、胡適と李大釗の間で「問題と主義」論争がはじまった。この論争の中で胡適は、いたずらに大衆を扇動する主義思想の高談を排除し具体的な問題を直視し解決のための方策を熟考することを説いた。しかしながら当然、山積する現実社会の問題に解決の糸口を見つけることは容易ではなかった。

このような状況にあった一九一九年七月二七日、胡適は『毎週評論』（第三二期）に短編小説「ある問題」<sup>33</sup>を發表した。この小品は、胡適がその翌週に發表した作品「我が息子」とあわせて考える時に独特の意味を持つ。作品はある日北京の公園で、小山がかつての同級生、朱子平と偶然出会った後に会話を交わすというスタイルをとっている。その中で読者には、子平は文学への夢を抱きながらも経済的に困窮し、妻と幼い子供を養うために苦悩している事情が語られる。現実社会の厳しさを前に、生活の術を得られず途方にくれて、朱子平は小山に「人間がこの世に生まれてくるのには、いったい何の意味があるのか？」と問うた。

この作品で、胡適は現実の社会で生活と理想の矛盾に苦悩する知識人をありのままに描いている。そこでは「終身大事」のように喜劇仕立てで現実を風刺し、解決方法のない問題を笑いの中ではぐらかす手法は用いていない。「ある問題」の主人公子平は苦悩の本質に正面から向き合った末、最後の場面で知識人の理想からかけ離れた自分の人生に何の意味があるのか、いかにして生きればいいのかを友人の小山に問いかけた。しかしもちろん家族の扶養と文学の創造に対する理想を両立するための方策は存在せず、主人公の問いに対する答えは見つからないままに作品は終わっている。

つづいて翌週の八月三日『毎週評論』（第三三期）に、胡適は白話詩「我が息子」を掲載した。この作品は、同年三月に長男祖望が誕生したことによって、父親となった彼の心情を主題とする。

わたしは本当に息子など要らない

なのに息子は自分の方からやって来た。

「無後主義」の看板は

もう掛けてはいられない。

…（中略）

将来お前が大きくなった時

わたしがお前にどんなふうに教えたか忘れてはいけない：

わたしはお前に一人の堂々たる人間になってほしい

わたしはお前に孝行な息子になどなってほしくない。<sup>34</sup>

「我が息子」は、留学時代から胡適が提唱してきた文学革命論に基づいて描かれた全一八行の白話詩である。胡適は留学中に独力で白話体の詩作を開始、帰国後も試行錯誤をつづけた結果この時期には、初期の段階では克服出来なかった五言あるいは七言の伝統的な定型詩のリズムから解放されて、白話詩の自由な音節の中に自分の思想を表現する術を体得しつつあった。「我が息子」は、自分の言葉で自分の精神を語るといって、彼の文学革命の精神を具体化した作品と言える。事実これより約半年後の一九二〇年三月、胡適は中国初の白話詩集『嘗試集』<sup>35</sup>を出版したが、そのなかにはこの「我が息子」も収められている。

作品の内容について考えると、「我が息子」は、胡適が前作「ある問題」の中で取り上げたものの答えを見出せず終わった父と子の関係を再考するという意味をもつ。すなわち「我が息子」において、胡適は父親の立場から突き放した表現で彼の考える父と子の関係を説き、中国の伝統に即した父子関係を結ぶことを拒んだのだった。

「我が息子」の発表に先立つ一九一九年二月、つまり長男祖望の誕生を目前にひかえた時期に、胡適は『新青年』

(第六卷第二号)に「不朽——わたしの宗教」と題した論考を発表していた。<sup>36</sup> 其中で胡適は、子を持つことを人生の最大目的とせず、自分の血統を伝える子は持たずとも社会的に貢献することで自分の名を不朽にする意義を述べた。胡適は、個人が父と子の関係に束縛されることなくその才能を最大限に伸ばすことが、社会に対する不朽の功績を生むと説いたのだった。しかし今や子が生まれてしまった以上、彼が「無後(跡継ぎをもたない)主義」を持論とするには不都合となった。「我が息子」はこうした立場の変化に対する胡適の意思表明でもあった。

生まれてきた子が父にとつての孝子である前に、まず堂々たる一人の人間であらねばならないという主張はこれまでに「米国の婦人」等の中で胡適が述べてきた、個人の自立というテーマの流れを汲むものである。「米国の婦人」は、近代社会の女性には伝統的な中国女性の生き方以外に自立の觀念に基づく人生觀が存在することを紹介するものだった。それに対して「我が息子」は、胡適自身の子が誕生したことをきっかけに、次世代に向けて発せられたメッセージである。胡適は、家庭内で家族の成員が互いに依存しあう関係を批判し、新しい世代の中国人に「自立」を求めたのだった。

「我が息子」が発表されるとすぐに胡適とは旧知の汪長祿から意見が寄せられた。胡適は直ちにこれに応え、『每週評論』第三四期には、汪長祿と胡適の間に交わされた往復書簡が掲載された。<sup>37</sup> それによれば、「我が息子」の中で胡適は子が父に対して孝を尽くす義務など存在しないことを説いたのに対し、汪は子を扶養した父に対して子が恩義を感じないはずはなく、胡適の言うように孝の觀念を過度に排除しようとする軽薄な考えを持つ「子」が胡適の意見を盾に老親を遺棄する恐れのあることを指摘した。汪が父と子の間に通じる情誼の存在を強調したのに対し、胡適は、たくまずして子を得た結果父となった者は、偶然自分のもとに生まれてきた子に対して誇りうる「功」など何もないという立場を崩さなかつた。つまり胡適は、中国の家庭内で伝統的に尊重されてきた孝の觀念と、父が子を扶養した結果両者の間に生じる「情誼」に偏った父子の関係を築くことを批判したのだった。子が父に対して孝

心と恩義を有することを前提に形成される父子関係が父と子の相互依存の温床となり、中国人の自立を損なう原因となることを、胡適は看過できなかったのである。

個人の自立を提唱すると同時に「我が息子」はまた「イプセン主義」の中で胡適が強調した「写実主義」への関心を反映する作品でもある。胡適はイプセンを、病状を発見してもそれに対して安易に処方箋を書かない作家と評したが、胡適は彼の子の世代が惰性の支配する中国社会の陥穽に陥らないための「処方箋」を示さねばならなかった。「我が息子」は巻頭から読者を刺激する言葉が並べられている。ここでは、視点を変えて意外性をたたえた表現で主張を繰り出す手法<sup>38</sup>が用いられてはいるが、「終身大事」に用いたような現実社会からの乖離を想起させる展開はない。「終身大事」の跋文に記されたように、胡適は写実主義の精神に悖る作品は読者の支持を得られないことを自覚せねばならなかったのである。大衆を扇動する政治的発言を排除しながらも、かたくなに変化を拒む中国社会に対し知識人の責任を果たすべく主張を展開し、なおかつ同時に現実の問題から乖離することなく読者の共感を得ようとした結果、胡適にはこのような手法しか残されていなかったと言える。

### おわりに

本稿では、一九一七年一月『新青年』における「文学改良芻義」の発表前後から、一九一九年八月『每週評論』に白話詩「我が息子」を掲載するまでの期間中におこなわれた胡適の文筆活動の一端を考察してきた。

この時期の胡適は、生命力にあふれた真の文学を創造するには白話によるしかないと確信し、当時の中国で実現可能な方策を示そうとした。しかし現実には、中国にはその指標となる作品さえ未だ存在しなかった。それゆえ胡適は欧米の文学作品を模範とするところから始めるべきという持論を実行に移し、『新青年』誌上を借りてノルウエーの

劇作家イブセンを取り上げて読者に紹介した。胡適にとつて、イブセンは社会の眞実を直視し、写実主義の精神で作品を書いた作家として重要な存在だった。イブセンを考察する中で胡適は、眞実を描いていない作品は読者の支持を得られないと自覚した。一九一九年には、かつての留学生仲間から請われ、イブセンの「人形の家」を下敷きにした風刺喜劇「終身大事」を書くが、この戯曲を演じようという女優がついに現われなかったのは、この作品を写実主義の精神に悖るためだと結論づけた。

一九一〇年代後半の中国で最も注目を集めた雑誌『新青年』には、多様な角度から新しい思想が次々と紹介され執筆者と読者の枠を越えて議論が進められた。胡適は『新青年』の主要な執筆者として活発な活動をおこなったが、与謝野晶子の論考を周作人が翻訳して掲載された「貞操論」は胡適にも強い刺激をもたらした。彼は、中国と同じ封建制度が色濃く残る日本の女性与謝野晶子の大胆な論調を新鮮な思いで受け止め、これに應える形でたちに「貞操問題」を投稿し、さらには中国女性の自立の必要性を説いて「米国の婦人」を著した。

胡適が多岐にわたるテーマで言論活動を進めていた時期、中国社会をとりまく政治情勢は急速に推移した。胡適は『新青年』に関わる人々と共に五四運動とその後の体制の変化に対応を余儀なくされたが、同時に彼は個人的な生活においてもいくつかの転機を経験した。すなわち帰国後まもなく母の決めた許婚江冬秀と結婚したこと、また五四運動開始の直前に長男祖望が誕生し父親となったことは、胡適が中国の家族関係について深く考える契機となった。

一九一九年七月、『毎週評論』に掲載された短編小説「ある問題」は、経済的困窮を解決できず理想と現実の矛盾に苦しむ若い知識人を主人公とする作品として書かれ、胡適は作品の中で現実には多くの知識人が抱える問題を正面から取り上げた。しかし、現実生活と文学者としての理想の両立という課題に解決策を見出すことは不可能だった。胡適はこの問いに答えを示せぬまま、つづいて翌週の『毎週評論』に「我が息子」を発表した。同作において胡適は、子は「父の孝子」となる前にまず堂々と自立した一人の人間になるべきことを鋭い口調で要求した。「米国の婦人」が

自立した人間として社会的活動をおこなう米国女性を例に中国女性の自立を説く意味を持ったのに次いで、「我が息子」は胡適にとって次世代の中国人の自立を提言する作品となった。

本文に述べたように、「我が息子」は胡適が米国留学中から帰国後の文筆活動の中で、民国前期の知識人として中国社会的の近代化のためにかなる立場を取るべきか試行錯誤を経た末に到達した、ひとつの帰着点を示す作品であった。だがまた視点を変えれば「我が息子」は、さまざまな角度から中国の儒教主義と伝統的な家庭制度について批判を繰り返してきた胡適が、父親として子と間にどのような関係を築くかという課題を初めて直視して書かれた作品でもある。五四時期の革新的な男性知識人たちは家庭問題を語るに当たって、男性と同等の教育を受ける機会を与えられず、「家」の中のみ存在を許され、社会的な活動を認められなかった女性の解放を提唱することを一つのテーマとした。これは五四青年の中に生じた、より強く抑圧され近代化の流れからより遠いところ位置する女性を解放しなければ中国の発展はないという問題意識によるものである。そのため五四青年たちは、結婚後父親となって現実の「子」に向き合った時に、父としていかにして子に接するかという問題を初めて自覚したのであった。胡適のみならず、同時期にたとえば魯迅<sup>39</sup> などからも発せられた「父とは何か」という論題については、稿を改めて考察したい。

1 本稿で用いた胡適の著作並びに関連資料、また本稿で取り上げた問題に関する先行研究として以下のものが挙げられる。  
『胡適作品集』全37卷（遠流出版社 一九八六）、『胡適全集』（季羨林主編 安徽教育出版社 二〇〇三）、『胡適之先生年譜長編初稿』（胡頌平編著 聯經出版事業公司 中華民國七九年）、『胡適日記 全編』（曹伯言整理 安徽教育出版社 二〇〇二）山口榮『胡適思想の研究』（言叢社 二〇〇〇）、張競『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店 一九九五）、野村浩一『近代中国の思想世界』（岩波書店 一九九〇）、耿雲志編『胡適評伝』（上海古籍出版社 一九九九）、胡明『胡

- 適伝論』人民文学出版社 一九九七)。
- 2 「文学改良芻義」『新青年』第2巻5号 一九一七年一月。
- 3 「建設的文学革命論」『新青年』4巻4号 一九一八年四月。
- 4 「易卜生主義」『新青年』第4巻6号 一九一八年六月。
- 5 「美国的婦人」『新青年』第5巻3号 一九一八年九月。
- 6 「貞操問題」『新青年』5巻1号 一九一八年七月。
- 7 「帰国雜感」『新青年』4巻1号 一九一八年一月。
- 8 『胡適日記 全編』第2巻 一九一六年八月二日「二四、文学革命八条件」。
- 9 「文学改良芻義」。
- 10 「逼上梁山——文学革命的開始」(胡適作品集1『四十自述』遠流出版公司 一九八六) 101～104頁。
- 11 「建設的文学革命論」。
- 12 同右。
- 13 同右。
- 14 同右。
- 15 同右。
- 16 同右。
- 17 通信欄「論文学改革的進程序」の項『新青年』第4巻5号 一九一八年五月。
- 18 「易卜生主義」。
- 19 同右。
- 20 同右。
- 21 拙稿「胡適と江冬秀——民国時期一知識人の家」関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』(東方書店 二〇〇四年) 参照。
- 22 周作人「貞操論」『新青年』第4巻5号 一九一八年五月。与謝野晶子作「貞操は道德以上に尊貴である」は一九一六年四

- 月東京天弦堂書房から刊行された『人及び女として』の中の一編として掲載された。周作人が「貞操論」を翻訳発表した経緯とその内容、これに触発された胡適の反応、及び当時の中国の恋愛観の諸相については、前掲張競『近代中国と「恋愛」の発見』第四章「東から来た『西洋』——与謝野晶子の貞操論と自由恋愛」参照。
- 23 「貞操論」「新青年」。
- 24 前掲張競『近代中国の「恋愛」の発見』第四章参照。
- 25 「貞操問題」。
- 26 「美国的婦人」。
- 27 「終身大事」「新青年」第6卷3号 一九一九年三月。「終身大事」の内容及びこの作品が『新青年』に掲載された経緯については、以下の研究に詳しい。伊月知子「胡適の覚醒『遊戯的喜劇 終身大事』——一九一〇～一九二〇年代の思想変遷の軌跡」『人文論叢』愛媛大学人文学会一九九九年、清水賢一郎「ノーラ、自動車に乗る——胡適「終身大事」を読む」『東洋文化』77号一九九七年。
- 28 「一個問題」『每週評論』第32期 一九一九年七月二七日。『胡適作品集6 貞操問題』（遠流出版公司 一九八六年）所収。
- 29 「我的兒子」『每週評論』第33期 一九一九年八月三日 同作品は後に『胡適作品集27 嘗試集』（遠流出版公司 一九八六年）所収。
- 30 『每週評論』と胡適の関係については、野村浩一前掲書第四章「『新青年』の世界と五四運動」参照。
- 31 「多研究些問題、少談些『主義』」『每週評論』第31期 一九一九年七月二〇日。
- 32 野村浩一前掲書226～227頁。
- 33 「一個問題」。
- 34 「我的兒子」。
- 35 『嘗試集』は前掲遠流出版公司「胡適作品集27 嘗試集」等を参照。また『嘗試集』の概要については山口榮「胡適の『嘗試集』」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』2 二〇〇四を参照。
- 36 胡適の作品「不朽」および彼の主張する「無後主義」については、胡明「無後、与不朽——試論五四時期胡適的社会倫理観」『学習与探求』総第96期 一九九五参照。

37 「我的兒子」『每週評論』第34期 一九一九年八月一〇日、後に『胡適作品集6 貞操問題』（遠流出版公司 一九八六年）所収。

38 胡適は解決困難な課題や、容易に改変することが不可能な状況を題材に創作をする場合、通常読み手の想定しない視点から問題を提起するという手法を繰り返し使った。一九二八年、胡適が本来気の進まぬまま結婚した妻江冬秀の内助を詠った「先人墓銘」（胡適作品集28 『後嘗試集』所収 遠流出版公司 一九八六）、女性解放運動の実践方法を述べて持論を詠じた「女子解放当从女子解放做起」（『星期評論』第8号一九一九年七月二七日、『胡適全集』第21卷安徽教育出版社二〇〇三所収）などにも、こうした胡適の特性が反映されている。

39 魯迅「我們現在怎樣做父親」『新青年』第6卷6号 一九一九年一月。